

# 友の会 通信

2007.4  
No. 81

ASSOCIATES NEWS  
THE MUSEUM OF ORIENTAL CERAMICS, OSAKA

展示のおしらせ  
4月7日(土)～9月30日(日)  
✦ 特別展  
美の求道者・安宅英一の眼—安宅コレクション

✦ 常設展  
東洋陶磁の展開  
(李秉昌コレクション韓国陶磁、日本陶磁)

✦ 休館日：月曜日(4/30、7/16、9/17、24を除く)、  
7/17、9/18、25  
開館時間：午前9時30分～午後5時、  
金曜日は午後7時まで  
(入館は閉館の30分前まで)

古い話をするようで恐縮だが、私の大学受験のころ(昭和二十六年)、受験科目は八科目だった。英語、国語のほか、数学では代数、幾何、微積分から二科目、理科では物理、化学、生物、地学から二科目、社会では日本史、世界史、地理から二科目選択で、計八科目。文科志望者に対してすら数学から二科目というのは、さすがに酷だと思った。今となつては微積分など、頭のどこをかき廻しても記憶のかけらもありはしない。しかし、微積分に限らず、意味不明の漢文漢詩の丸暗記や、ニュートンの運動の法則など、今の私には縁もゆかりもないことの学習が、おそらくは潜在意識の中では何かしらかなり重要な役割を未だに果たしているのだらうと思う。

それに引きかえ、昨今の教育制度は、生徒や学生に対してどんどん甘くなっているようである。例えば、円周率は三と覚えるだけでよい、などという教育は、どこの誰がそういふことを決める権利を持つているのだらうか。

中谷宇吉郎氏は、雪博士として知られる世界的な物理学者である。さらに寺田寅彦門下で、随筆家としても味わい深い作品を多く残している。最近、氏の随筆「簪を挿した蛇」(「中谷宇吉郎随筆集」岩波文庫、二九八八年)を読んだ。題名に引かれてのことである。石川県大聖寺という地方で小学校生活を送ったころの回想で、懐かしい想出がいっぱい詰まっている。小学校のすぐ後に小さい山があり、そこには前田家以前の豪族の城があったという。城が落城する時に、奥方や姫たちが池に入るか崖から飛び降りるかして死んだという伝説が伝わっていて、子供たちには人跡未踏の魔境であった。そこには簪を挿した蛇だの両頭の蛇だのがいるという噂で、子供たちは誰も疑わなかった。夢や幻想や伝説が、生きていたのである。

中谷氏によれば、自然に対する驚異の念を深めるのには、思い切った非科学的な教育が、案外役に立つのではないか、という。「海坊主も河童も知らない子供は可哀相である」。さらに「子供の中から目覚時計を直すことが好きだったり、機関車の型を皆覚えたりする子供」より、簪を挿した蛇を、こわがり、打ち震えている子供のほうが実は科学者としてはるかに有望であらうと。真実や真理というものは、案外、誰も気付かないところにひっそりと隠れているものなのだろう。簪を挿した蛇など、馬鹿なことを言うものではない、と笑する合理主義的教育者がいたとすれば、私はその人の眼を深く見入って確かめたい、この人は、きわめて出来のよい日本製のサイボーグではないかと。

## 風塵往来 9

(館長 伊藤郁太郎)

## 展示室から

### 特別展「美の求道者・安宅英一の眼」

重美・青磁彫刻童女形水滴、童子形水滴(表紙)

両の手で包みこめるほどの大きさの、愛らしい童女と童子の姿に作った水滴です。童女は、蓮の蕾形の鬘が蓋になっており、そこから体内に水を溜め、抱え持った瓶の口から注ぎ出す仕組みです。一方童子のほうは、底部にあけられた穴がそのまま体内に管となって立上り、それが注入口となっています。一度内部に溜まった水はこの穴からこぼれることなく、胸に抱いた鴨の口から注ぐことができます。これらの作品は、釉薬や胎土の調子、全体の作行や大きさ、腫のかすかな鉄彩や繊細な線刻文様などの共通点から、同一の窯の産と考えられます。

展示では一対としてご覧いただくことが多いのですが、それぞれの間隔や向きなどのわずかな違いで、微妙に表情が異なってきます。内緒話のささやき声が聞こえてくるような愛らしさに、熱烈なファンがいらっしやる一方で、小さな作品のためか、展示していることに気付かれない方もおられるようです。そこで、今回は特別展の紹介号として、2点一緒に写真を掲載してみました。少し澄ました表情の女の子と、どこか愛嬌のある男の子、どちらがお好みでしょうか。(K.N.)



写真上  
青磁象嵌雲鶴文碗 高麗時代・12世紀中葉  
d:17.0cm 李秉昌氏寄贈

写真下  
色絵秋草文徳利 京焼・古清水(「岩倉」印)  
江戸時代・17世紀後半 h:24.2cm

### 常設展「東洋陶磁の展開」

李秉昌コレクション韓国陶磁 青磁象嵌雲鶴文碗

口から底にかけて直線状にすばまるシャープな形の美しい碗です。笠を伏せたような形の碗は、茶がなめらかに流れるように作られたもので、高麗時代にも茶碗として使われたようです。内面には美しく澄んだ青色を背景に鶴と雲があらわされますが、鶴が青空にゆったりと浮かんでいるかのようです。雲鶴は瑞兆(良いことが起こるさざし)を意味しますが、いまなお景色の美しい全羅北道扶安窯で焼かれたためでしょうか、美しい自然の景色をそのまま切り取ったかのようでもあります。(M.K.)

### 日本陶磁 色絵秋草文徳利

昨年、京都国立博物館で開催された特別展「京焼一みやこの意匠と技一」は、最新の調査・研究の成果を反映した京焼の歴史をたどる総合的かつ大規模な展覧会として大きな話題を呼びました。本作品は底裏に「岩倉」印のある貴重な伝世品として同展に出品されました。展覧会を企画した京都国立博物館の尾野正裕研究員によると、同一の「岩倉」銘のある陶片が京都御苑(公家町遺跡)の土壌(1670年頃から1690年頃)から出土していることから17世紀後半の製作と考えられ、赤絵のある作例としては古清水でも古作に属する稀少な作例とのことです。京焼らしい華やかで雅な作風は、数多くの出品作の中でも一際輝いて見えました。(H.K.)

休館のおしらせ:平成19年10月1日(月)より平成20年3月31日まで、地下電気機械室工事のため、半年間休館をいたします。



重美・青磁彫刻童女形水滴 青磁彫刻童子形水滴  
高麗時代・12世紀前半  
h:11.4cm、11.0cm Acc.No.20171、21131

## 編集後記

✦ 暖冬のため早くから咲き始めた花々が、寒の戻りで寒そうです。反対に沖縄では暖冬のために桜の開花が遅れているとか。開花に必要な寒さ体験がないからでしょうか、やはり日本の風土には三寒四温が必要なですね。  
✦ 開館25周年として「安宅英一の眼」を開催します。今回は、これまでの時代別の展示ではなく、安宅コレクシ

ンの成立とその変遷を、ご覧いただきたいと企画しました。当時の社会背景も加わり、ある種の昭和史といっても過言ではないと思います。どうぞ、ご覧下さい。(S.S.)  
ボランティアの窓  
✦ 京都祇園にある日本最古の禅寺建仁寺は、祇園の賑わいの中にあるとは思えない静けさです。小泉淳作画伯の天井絵も俵屋宗達の真作の風神雷神図も素晴らしいし、庭も禅寺らしく掃き清められています。法堂のゆったりとした落ち着きを眺めながら、方丈の縁側で一休み。そして何より、洗面所の白磁に青花の魚模様の洗が、お気に

入りです。これぞ日用雑器と、芸術品とのコラボレーション。建仁寺に行かれたら洗面所は、必見です。(M.K.)

大阪市立東洋陶磁美術館  
友の会通信 通巻第81号  
2007年4月1日発行 No.23-1(年4回)

編集・発行:大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局  
〒530-0005 大阪市 北区中之島1-1-26  
TEL.06-6223-0055  
http://www.moco.or.jp  
デザイン:清嶋滋+studioTWN 印刷:岡村印刷工業株式会社

# 開館25周年記念特別展 「美の求道者・安宅英一の眼」



Fig.1  
三彩刻花花花瓶 磁州窯系  
金時代・12世紀 h:33.4cm



Fig.2  
重文・青磁象嵌海石榴華文水注  
高麗時代・12世紀中葉 h:19.0cm



Fig.3  
青花梅竹文壺 朝鮮時代・16世紀 h:35.0cm

大阪市立東洋陶磁美術館は、今年開館25年を迎えます。それを記念して特別展「美の求道者・安宅英一の眼—安宅コレクション」(4月7日～9月30日)を開催いたします。

安宅コレクションは、約1,000点に及ぶ中国・韓国陶磁のコレクションで、東洋陶磁のコレクションとしては世界第一級の質と量を誇ります。このコレクションが住友グループ21社から大阪市に寄贈され、それを収蔵・展示する施設として設立されたのが、東洋陶磁美術館です。

安宅コレクションとは、かつての安宅産業株式会社が事業の一環として収集した美術品コレクションで、中国・韓国を主体とする陶磁器のコレクションがその中心でした。この安宅コレクション形成にあたって指導的役割を担ったのが元取締役会長・故安宅英一氏(1901～94)です。安宅コレクションは、安宅英一氏の研ぎ澄まされた鑑識眼と自らの美的価値観に対する妥協のない完璧主義によって生まれたコレクションであり、氏なくして安宅コレクションは築かれなかったでしょう。安宅英一氏は美術のみならず音楽にも造詣が深く、第二次世界大戦以前から日本のクラシック音楽界におけるパトロン的存在として多大な功績を残しました。美の真髄を全身全霊の真摯さで求め続けた安宅英一氏の姿はまさに“美の求道者”と呼ぶにふさわしいものでした。安宅コレクションは、安宅英一氏が提示した一つの美の価値基準ともいえることができます。

この特別展では、飛青磁花生、油滴天目茶碗の2点の国宝をはじめ、青花蓮池魚藻文壺など12点の重要文化財(以下、重文)をすべて一堂に展示し、初公開作品、関連作品なども含めて約200点というかつてない規模と内容によって、同コレクションの生みの親ともいえる安宅英一氏の眼にせまります。

## 第I部 コレクションの形成

第I部では安宅コレクションの形成過程を4期に分けて紹介します。

第1期 草創期:昭和26年～昭和28年(1951～1953)

美術品の収集が会社の事業として正式に認められ、開始されたのは、昭和26年のことです。企業利益の社会的還元と、社員の教養向上とがその目的としてあげられました。これを発案し実現させたのが、安宅英一氏です。当初の収集作品は、主に近代日本画家の天才といわれた速水御舟(1894～1935)の作品でした。御舟作品の最大のコレクターが、コレクションの一部を売却し始めたため、その散逸を防ごうとしたことがきっかけでした。安宅コレクションは、速水御舟の絵画によって始まったと言っても過言ではないでしょう。「炎舞」(昭和52年、重文指定)や「翠苔緑芝」、「名樹散椿」(同年、重文指定)などの代表作を始めとして、計106点に上る作品が収集され、中国陶磁・韓国陶磁とともに安宅コレクションの3本柱を形成していました。しかし、これら速水御舟の作品は、安宅産業の経営破綻ともなって昭和51年、山種美術館に一括売却され、現在は同館コレクションの主軸となっています。それ以降現在にいたるまで、安宅コレクションとは、中国・韓国を中心とする東洋陶磁のコレクションのみを指すようになりました。

安宅コレクションの草創期である第1期は、以上のような理由から、陶磁器の購入については30点に満たず、質的にも際立ったものは数が少ないといえます。韓国陶磁が大部分である中で、唯一の中国陶磁が素朴で味わい深い金時代の三彩刻花花花瓶(Fig.1)である点に、安宅氏の好みの多様性が現れています。

第2期 発展期:昭和29年～昭和40年(1954～1965)

第2期は、昭和29年から昭和40年までの12年間で、安宅コレクションの土台が固まった発展期です。

この時期の特徴は、次第に名品主義の姿勢が鮮明になってくることです。特に韓国陶磁については、その傾向が顕著です。高麗時代では青磁象嵌海石榴華文水注(Fig.2)や、青磁彫刻童女形水滴、青磁印花龍文方形香炉などの旧重要美術品(以下、重美)5点を入手。海石榴華文水注は、昭和55年に重文に指定されています。朝鮮時代では、粉引祭器や粉引徳利、白磁透彫蓮花文盆台、16世紀青花の代表作・青花梅竹文壺(Fig.3)や秋草手の名品・青花草花文面取壺、鉄砂虎鷲文壺など、安宅コレクションの韓国陶磁部門の骨格ともいえる作品が収集されています。一方中国陶磁については、韓国陶磁の102件に対して、12年間でわずか20点と量的にはいまだに少ない状態でした。しかし、その内訳を見ると、重美・三彩宝相華文壺、重美・緑釉樓閣、青磁鳳凰耳花生(昭和43年、重文指定)など、やはり名品主義の一端がうかがえます。また、特筆すべきは、古美術商の広田松繁(不孤斎)氏から、昭和29年に定窯・白磁刻花蓮花文深鉢(同46年、重文指定)、鈞窯・紫紅釉盆、万曆・五彩松下高士図面盆の3作品を入手したことです。これを契機として安宅氏の中国陶磁収集熱は一挙に加速し、次の第3期において、飛躍的に充実していきます。

第3期 成熟期:昭和41年～昭和50年(1966～1975)

第3期の特徴は、特に中国陶磁の収集についてたいへん充実した時期であったということです。昭和40年代の景気拡大という時代背景もあり、昭和41年の国宝・飛青磁花生、43年の国宝・油滴天目茶碗など、重要な作品を立て続けに購入する機会に恵まれました。

従来作品の購入は、おもに東京・大阪の古美術商からおこなっていましたが、この時期に新たに、欧米の古美術商やオークション会社との取引が始まりました。以後、安宅コレクションの購入先は国内外を問わず大きく

拡大することとなりました。特に中国人古美術商・仇焱之氏との出会いは、コレクションの形成に大きな役割を果たしました。仇氏からの購入品の中には、法花花鳥文壺(昭和47年、重文指定)(Fig.4)、磁州窯・緑釉黒花牡丹花瓶(同54年、重文指定)、宣徳・瑠璃地白花牡丹文盤(同年、重文指定)(Fig.5)、南宋官窯・青磁八角瓶、磁州窯・黒釉刻花牡丹文梅瓶、嘉靖・黄地紅彩龍文壺、元時代・瑠璃地白花龍文小盤、汝窯・青磁水仙盆、成化・青花蜀葵文碗など安宅コレクションの中国陶磁の中心となる作品が数多くあります。購入後に重文に指定された作品がいくつもあることからその質の高さがうかがえます。

韓国陶磁についても、高麗時代の青磁辰砂彩の典型作が3点、朝鮮時代では粉青鉄絵の代表作・鉄絵鳥魚文倭壺、初期青花の名品・辛丑銘梅竹文壺など、名品主義という収集方針は依然健在でした。

第4期 整理期:昭和51年(1976)

昭和52年9月30日を以て、安宅産業株式会社は幕を閉じ、翌10月1日から安宅産業は伊藤忠商事株式会社と合併しました。しかしコレクションについては、安宅産業の清算管理会社であったエーシー産業が受継ぎ、債権者である住友銀行・協和銀行と共同して管理に当ることとなりました。

安宅コレクションの収集活動は、事実上、昭和50年3月末で終わりました。第4期はコレクションの整理期に当たります。収集が検討されながら実現できず、一時的に安宅産業の系列会社の保管となっていたものを正式にコレクションとして管理を移管した時期です。これらの中には青磁象嵌牡丹文陶板、粉青象嵌蓮弁文蓋(Fig.6)、青花双鶴文壺などの重要な作品が含まれており、収集の最後の時期に至っても厳しい選択基準が貫かれていたことがわかります。

## 第II部 美の選択——ものは 三顧の礼をもって迎えるべし

第II部では作品をとおして、コレクションの生みの親である“安宅英一の眼”にせまります。

通常このような場合、文章や記録などの文字資料・日常に語られた言葉などが重要な手懸りとなります。しかし、安宅英一氏の場合、自身によって記されたコレクションに関する文章がほとんど残らず、語られたいくつかの言葉や記憶されるエピソードなどによって推し量らざるをえません。従って収集された作品そのものが極めて重要な証人となるのです。

氏が残した言葉として、「人でも、物でも、結局のところは品ですな」、「何故、集めるのですか、と質問されたら、月並みですが、そこに山があるから、ということだけでしょうね」、「三顧の礼をもって、ものは迎えなければなりません」などがあります。安宅氏にとってやきものとは、単に美しさや味わい深さをそなえた物質的なものではなく、極めて精神的なもの、それと向き合うに際し厳しく自己を見つめ、研ぎ澄ませねばならないもの、自己の全てが投影されるもの、ではなかったかと推測されます。そのような意味で、1点1点の作品を厳しく吟味した安宅氏の収集の姿勢はまさに“美の求道者”といえるものであったのです。

作品に則して見た場合、安宅コレクションには中国陶磁だけでも、官窯磁器、磁州窯の民間陶器、副葬用の陶器類、など様々なジャンルがあります。鑑賞陶器、茶陶、民芸などの分類や、様々な伝統、しきたりとらわれることなく、いかにも心のままに収集されたかのようです。しかしそこにはやはり、1本のゆるぎない信念ともいえるものがあり、物言わぬ個々の作品がそれを静かに語ってくれているようです。あえて言葉にするならば、それは品格とも精神性ともいえるものであり、それはそのまま、コレクションの生みの親である安宅英一氏の人格そのものでもあるのです。

## 第III部 安宅コレクションの小品——小さきものへの眼差し

安宅コレクションには、約200点の水滴、筆筒、杯などの小品類があり、これも一つの特徴となっています。小さいながらも存在感あふれるもの、思わず手に取りたくなるような愛らしいもの、実際に使ってみたくなるもの、資料的にたいへん価値の高いものなど…。個々の作品の持つ意味合いは様々ですが、いずれも安宅氏の審美眼にかなった、優れた品々です。従来安宅コレクションの展示では、収集の多様性を示す例として、また、少し遊びの心を取り入れたしつらえとして、展示の最後に小品コーナーを設けてきました。今回は、1部屋を小品の展示にあて、ゆかりのかたがたからの寄贈品も交えて、コレクションの異なる一面をお楽しみいただけます。

※本展は、東京、福岡、金沢にも巡回します(展示点数は異なる場合があります)。

[東京]三井記念美術館 平成19年10月13日(土)～12月16日(日)

[福岡]福岡市美術館 平成20年1月5日(土)～2月17日(日)

[金沢]金沢21世紀美術館 平成20年2月29日(金)～3月20日(祝・木)

※本号では特別展「美の求道者・安宅英一の眼—安宅コレクション」の開催にあわせ、展示内容のご紹介を優先いたしました。特別展「將軍家への献上(鍋島)—日本磁器の最高峰」の講演会要旨は次号に掲載いたします。ご了承ください。



Fig.4  
重文・法花花鳥文壺 明時代・15世紀  
h:44.5cm



Fig.5  
重文・瑠璃地白花牡丹文盤 景德鎮窯  
明時代・宣徳(1426-35) d:38.7cm



Fig.6  
粉青象嵌蓮弁文蓋 朝鮮時代・15世紀前半  
d:26.1cm

(文責:友の会事務局)